

学修成果検証アンケート 報告書

(平成 27 年度～29 年度卒業生対象)

令和 2 年 2 月

新潟大学

内容

はじめに	- 1 -
1. 概要	- 2 -
2. 目的	- 3 -
3. 方法	- 3 -
3.1. 対象	- 3 -
3.2. 調査の時期	- 3 -
3.3. 調査項目	- 3 -
3.4. 分析	- 4 -
3.4.1. 有用と感じた教育方法	- 4 -
3.4.2. 学修成果及び実社会の要請に関する自己評価と他者評価の分析	- 4 -
3.4.3. その他の項目の分析	- 4 -
4. 卒業生調査	- 5 -
4.1. 住居	- 5 -
4.2. 卒業年度	- 5 -
4.3. 性別	- 5 -
4.4. 出身地	- 6 -
4.5. 学部	- 6 -
4.6. 主専攻プログラム	- 7 -
4.7. 職業の状況	- 8 -
4.8. 業務内容	- 9 -
4.9. 転職の有無	- 9 -
4.10. 有用な教育方法	- 10 -
4.11. 身につけた知識・能力の自己評価	- 13 -
4.12. 実社会の要請	- 15 -
4.13. 身につけた能力と社会で必要な能力の関係	- 18 -
4.14. 本学への進学理由	- 22 -
4.15. 満足度	- 23 -
4.16. 本学の評価	- 23 -
5. 企業調査	- 24 -
5.1. 業種	- 24 -
5.2. 在職者数	- 24 -
5.3. 卒業生の知識・能力レベル	- 25 -
5.4. 実社会での要請	- 26 -
5.5. 卒業生の知識・能力レベルと実社会の要請の関係	- 27 -
5.6. 学生の自己評価と企業からみた卒業生の知識・能力レベル	- 28 -
5.7. 卒業生と企業からみた実社会での要請	- 29 -
5.8. 新潟大学に求められるもの	- 30 -

はじめに

新潟大学教育・学生支援機構長 小久保 美子

新潟大学では、教育成果を検証することを目的に、3年に1回、学修成果検証アンケートを実施しております。このアンケートは、卒業後1年目から3年目までの卒業生を対象にしているもので、平成27年度から平成29年度までの卒業生と就職先の企業を対象としたアンケート調査となります。本報告書はその概要です。

新潟大学は「自律と創生」を理念に学士課程教育を実施していますが、本アンケート調査は、卒業して実社会で働いている方々が、大学で受けた教育をどのようにみているか（自己評価）、そして採用された企業は本学卒業生をどのようにみているか（他者評価）の両面から、本学の教育の質を検証し、今後の教育改善に活かすことを目的としたものです。この形式でのアンケート調査も5回目となり、15年分のデータが蓄積されています。この度の調査は平成28年度から始まった第3期中期計画を踏まえ、前4回の調査項目の一部の見直しを図り実施しました。

自己評価と他者評価とを直接比較することは難しいですが、卒業生は概ね企業側が見るより厳しく自分を見ているようで、この傾向は前回調査とも一致しています。一方、大学時代に受けた教育に対するご意見の中には肯定的なものだけでなく、厳しいものもありました。得られたデータをいかに教育改善に活かしていくかは喫緊の課題ととらえております。

教育課程は学問的要請だけでなく、社会的要請の側面からも検討され、修正改善されていかなければならないものです。本学では養成すべき人材像を4つの教育目標領域、すなわち「知識・理解」、「当該分野固有の能力」、「汎用的能力」、「態度・姿勢」として明示しました。学士課程で身に付けた力（学士力）が、その後の社会でどのように活かされているのか、より高い資質・能力を身に付けた学士を輩出するためには、教育課程の何をどう改善していけばよいのか。皆様方からいただいた貴重なご意見を踏まえ、主専攻プログラム、副専攻プログラムはもとより、課外活動を含めた本学学士課程教育の一層の改善と充実を図っていく所存です。

ご多用の中、本学の調査にご協力くださいました卒業生の皆様、企業の皆様に感謝と御礼を申し上げます。

1. 概要

教育方法について、もっとも有用とされたのが「自ら調べてレポートや論文をまとめる」であり、ついで「現場や実物で学ぶ」、「教員の話聞く」、「自ら考えをもち他の学生と議論する」、「学生が報告をまとめる」、「繰り返し練習し技能に習熟する」であった。学系ごとの比較の結果、「自ら調べてレポートや論文をまとめる」、「教員の話聞く」では差がなく、「現場や実物で学ぶ」、「自ら考えをもち他の学生と議論する」、「学生が報告をまとめる」、「繰り返し練習し技能に習熟する」では学系の特徴があった。

卒業生の自己評価が高い項目は、「専門を理解するための基礎的な力」が最も高く、ついで「グループで協働する能力」であり、以下、「良好な対人関係を構築する能力」、「文書作成・執筆能力」、「自分の考えを表現したりプレゼンテーションする能力」などであった。学系毎の比較ではいくつか差のある項目もみられ、カリキュラムの違いによって学生が身につけたと考える能力も異なることが示唆された。

卒業生自身が感じる実社会の要請は「モラル・倫理観・責任感」が最も高く、ついで「ものごとを総合的に判断する力」であり、以下「自分の心身の健康に気をくばる大切さ」、「課題を解決する能力」、「良好な対人関係を構築する能力」、「パソコンなどの情報機器を使う能力」であった。学系毎の比較ではいくつか差のある項目もみられ、カリキュラムの違いによって学生が必要と考える能力も異なることが示唆された。

卒業生の自己評価と実社会の要請について関係をみたところ、23 の知識・能力全てにおいて、実社会の要請の方が自己評価を上回っていた一方で、専門理解のための基礎的な力、学修成果を活用する意欲、異文化への興味・関心という 3 つの力に関しては、卒業生が実社会で必要であると考えられる程度に近い学修成果を得ているものと考えられた。

また、企業が認識する新潟大学卒業生の知識・能力と、それらの能力が実社会でどの程度必要かという認識との差は大きくなかった。この傾向は、過去 4 回の調査とも一致するものである。

新潟大学を卒業したことに対する満足度は「満足している」＋「どちらかといえば満足している」を合計すると 92.1%であった（第 4 回は 92.2%で微減）。また、新潟大学への実社会の評価については「どちらかと言えばそう思う」＋「そう思う」を合計すると 58.5%であった（第 4 回 61.9%で微減）。第 1 回以降、満足度、大学に対する社会の評価いずれも肯定的評価の増加傾向が示唆されてきたが、第 5 回は微減した。

2. 目的

本学が提供している教育が、その目的に即しているのか、学生が身につける学力、資質・能力や育成しようとする人材像に照らして、教育の成果が上がっているのかを検証することを目的とする。

3. 方法

3.1. 対象

卒業生に対するアンケート（以下、卒業生調査）は、平成 27 年度から平成 29 年度までに卒業した学部学生 6,762 名を対象とし、732 名から回答を得た（回収率 10.83%）。

企業に対するアンケート（以下、企業調査）は、過去 3 年間に 5 名以上の採用実績のある企業 298 社を対象とし、119 社から回答を得た（回収率 39.93%）。

3.2. 調査の時期

平成 31 年 1 月に郵送し、回収期限は平成 31 年 1 月下旬とした。

3.3. 調査項目

卒業生調査は、①住まい（県内・県外）、②卒業年度、③性別、④出身地（県内・県外）、⑤卒業学部、⑥主専攻プログラム、⑦業種、⑧職務内容、⑨転職の有無、⑩有用な教育方法（自由記述含む）、⑪学修成果の自己評価、⑫実社会での必要度、⑬本学への進学理由、⑭満足度、⑮本学の実社会の評価、⑯本学の教育に対する意見・要望である（巻末に調査用紙を掲載）。

企業調査は、①会社概要、②卒業生在職状況、③新潟大学卒業生知識・能力レベル、実社会での必要度、④今後本学に求められると思うもの、⑤学び直しへのニーズ、⑥本学に対する意見・要望である（巻末に調査用紙を掲載）。

このうち、卒業生調査⑪、⑫、企業調査③については、学修成果及び実社会の要請に関する自己評価と他者評価の関係にある。



3.4. 分析

3.4.1. 有用と感じた教育方法

アクティブラーニングの導入など教育方法改善の機運が高まっていることを受けて、前回の調査から在学中に有益だった教育方法についての項目を設けている。学系毎の特徴を把握するために、カイ二乗検定および残差分析を行った。

3.4.2. 学修成果及び実社会の要請に関する自己評価と他者評価の分析

卒業生調査⑪、⑫、企業調査③については、過去4回の経年変化をみた分析でも間隔尺度と見なして分析しており、今回のデータについても分布を確認し間隔尺度とみなしてよいと判断し分析した。

卒業生については、学修成果及び実社会での要請の認知について、全学、学系毎で分析した。企業の本学学生の知識技能レベル（他者評価）と本学学生の学修成果（自己評価）の関係、企業と本学学生の実社会での要請の関係についても検討した。

ただし、アンケートの送付と回答は卒業生と企業別々で行わざるを得ないことから、アンケートに回答いただいた卒業生と、企業がイメージしている卒業生とは必ずしも一致しているわけではない。

まず、全体的な傾向を把握するため、平均値の比較、平均値の高い項目の比較を行う。また、後述するが前回調査により実社会の要請と比較すると学修成果は自己評価・他者評価とも平均値が低いことがわかっており、要請すべき人材像とのギャップと捉えることも出来る。そこで、実社会の要請の平均値から学修成果の平均値を引いた値をこのギャップの大きさと捉え、分析した。これを踏まえ、過去4回の調査における傾向を把握した。

3.4.3. その他の項目の分析

それ以外の項目について、単純集計により分析・解釈した。

4. 卒業生調査

以下では、卒業生調査の結果について記載する。

4.1. 住居

回答者の住居は以下のとおりであった。

回答	件数	%
新潟県内	346	47.3
新潟県外	382	52.2
無回答	4	0.5
計	732	100.0

4.2. 卒業年度

回答者の卒業年度は以下のとおりであった。直近の卒業生の回収率が高いのはこれまでの調査と同様であった。

回答	件数	%
平成 27(2015)年度	133	18.2
平成 28(2016)年度	239	32.7
平成 29(2017)年度	355	48.5
無回答	5	0.7
計	732	100.0

4.3. 性別

回答者の性別は以下のとおりであった。

回答	件数	%
女性	372	50.8
男性	358	48.9
無回答	2	0.3
計	732	100.0

4.4. 出身地

回答者の出身地は以下のとおりであった。

回答	件数	%
新潟県内	302	41.3
新潟県外	428	58.5
無回答	2	0.3
計	732	100.0

4.5. 学部

回答者の出身学部は以下のとおりであった。教育学部が 16.0%と最も多く、ついで工学部、人文学部、医学部保健学科、経済学部が多かった。

回答	件数	%
人文学部	84	11.5
法学部	65	8.9
経済学部	74	10.1
教育学部／教育人間科学部	117	16.0
理学部	64	8.7
工学部	112	15.3
農学部	65	8.9
医学部医学科	31	4.2
医学部保健学科	80	10.9
歯学部	39	5.3
無回答	1	0.1
計	732	100.0

4.6. 主専攻プログラム

回答者の卒業した主専攻プログラムは以下のとおりであった。

回答	件数	%
心理・人間学	14	1.9
社会・地域文化学	20	2.7
歴史文化学	12	1.6
日本アジア言語文化学	9	1.2
西洋言語文化学	16	2.2
メディア・表現文化学	13	1.8
初等教育	33	4.5
中等教育	30	4.1
特別支援教育	4	0.5
学習社会ネットワーク	15	2.0
生活科学	3	0.4
健康スポーツ科学	8	1.1
芸術環境創造	23	3.1
法学	64	8.7
経済学	47	6.4
経営学	25	3.4
数学	11	1.5
物理学	13	1.8
化学	8	1.1
生物学	8	1.1
地質科学	9	1.2
自然環境科学	17	2.3

回答	件数	%
医学教育	30	4.1
看護学	46	6.3
放射線技術科学	11	1.5
検査技術科学	23	3.1
歯学教育	22	3.0
口腔生命福祉学	13	1.8
機械システム工学教育	25	3.4
電気電子工学科教育	16	2.2
情報工学	7	1.0
福祉人間工学	12	1.6
化学システム工学	19	2.6
社会基盤工学	10	1.4
建築学	12	1.6
機能材料工学	11	1.5
食料・資源経済学	7	1.0
植物生産学	10	1.4
動物生産学	1	0.1
応用生物化学	23	3.1
森林環境学	15	2.0
農業工学	8	1.1
無回答	9	1.2
上記以外	0	0.0
計	732	100.0

4.7. 職業の状況

回答者の職業の状況について、学系毎に集計した結果を示す。

なお、以降の分析ではカイ二乗検定を行って学系ごとの差を確認するため、各質問項目において欠損のあった回答（単一回答項目で複数の項目を回答しているものなどを含む）は除外して分析を行った。

学系ごとの差を確認するためにカイ二乗検定を行ったところ、有意であった。残差分析の結果、人文社会科学系（以下、人社系）は公務員・団体職員等，自然科学系（以下，自然系）は会社員，大学院生，医歯学系はその他（在学中）が有意に多かった。

		職業の状況								合計
		会社員	公務員・団体職員等	自営	パート・アルバイト等	専業主婦・主夫	無職	大学院生	その他	
学系	人文社会	度数	102	199	5	6	0	6	15	340
	科学系	調整済み残差	-0.9	7.2	0.9	1.2	-1.6	0.9	-8.0	-2.3
	自然科学	度数	91	50	3	2	1	2	88	241
	系	調整済み残差	2.5	-9.0	0.3	-0.7	0.0	-0.9	10.6	-2.1
	医歯学系	度数	38	75	0	1	2	2	14	149
		調整済み残差	-1.8	1.6	-1.4	-0.7	2.0	0.0	-2.5	5.4
合計		度数	231	324	8	9	3	10	117	730

注）網掛けは調整済み残差が1.96以上（5%水準で有意）であった項目

4.8. 業務内容

回答者の業務内容について、学系毎に集計した結果を示す。

学系ごとの差を確認するためにカイ二乗検定を行ったところ、有意であった。残差分析の結果、人社系は管理的職業、事務的職業、販売、サービス、保安、自然系は農林漁業、生産工程、建設・機械運転、医歯学系は専門的・技術的職業が有意に多かった。

		業務内容											合計
		管理的職業	専門的・技術的職業	事務的職業	販売の職業	サービスの職業	保安の職業	農林漁業の職業	生産工程の職業	輸送・機械運転の職業	建設・機械運転の職業	運搬・清掃・包装等の職業	
学系	人文社会科学系	度数	16	80	147	25	23	6	0	3	3	1	305
		調整済み残差	2.0	-10.5	9.6	2.2	3.0	2.4	-2.3	-1.4	0.9	-3.9	-0.1
	自然科学系	度数	5	67	30	11	5	0	5	7	1	16	148
		調整済み残差	-0.3	-0.5	-3.2	0.8	-1.0	-1.4	3.9	3.3	0.0	6.6	0.8
	医歯学系	度数	1	130	3	0	1	0	0	0	0	0	135
		調整済み残差	-2.1	13.0	-8.2	-3.4	-2.6	-1.3	-1.2	-1.7	-1.1	-2.3	-0.8
	合計	度数	22	277	180	36	29	6	5	10	4	17	588

注) 網掛けは調整済み残差が1.96以上(5%水準で有意)であった項目

4.9. 転職の有無

転職の有無について、学系毎に集計した結果を示す。その他を除いた643名中、42名(6.53%)が転職していた。学系ごとの差を確認するためにカイ二乗検定を行ったところ、有意であった。残差分析の結果、自然系はその他(大学院生)、医歯学系は転職していない者が有意に多かった。

		転職の有無			合計	
		転職した	転職していない	その他		
学 系	人文社会科学系	度数	22	301	14	337
		調整済み残差	0.4	0.9	-1.6	
	自然科学系	度数	15	162	20	197
		調整済み残差	1.0	-3.1	3.3	
	医歯学系	度数	5	138	4	147
		調整済み残差	-1.6	2.4	-1.7	
合計	度数	42	601	38	681	

注) 網掛けは調整済み残差が1.96以上(5%水準で有意)であった項目

4.10. 有用な教育方法

有用な教育方法について、「新潟大学で受けた講義，演習等で，どのようなものが有用であったと思いますか。以下の項目 1) ～ 6) のそれぞれについて，該当する番号を 1 つ選び，○をつけてください」と尋ねた。

全体の傾向を把握するために，大変有用であった 5 点，どちらかといえば有用であった 4 点，どちらかといえば有用ではなかった 3 点，全く有用ではなかった 2 点，そのような講義，演習等は受講しなかった 1 点として得点化した。

以下に平均値の高い順に記述統計料をまとめた結果を示す。最も有用とされたのが「自ら調べてレポートや論文をまとめる」であり，ついで「現場や実物で学ぶ」，「教員の話聞く」，「自ら考えをもち他の学生と議論する」，「学生が報告をまとめる」，「繰り返し練習し技能に習熟する」であった。

	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
自ら調べてレポートや論文をまとめる	727	1	5	4.27	0.695
現場や実物で学ぶ	726	1	5	4.26	1.169
教員の話聞く	727	1	5	4.15	0.656
自ら考えをもち他の学生と議論する	725	1	5	4.12	0.928
学生が報告をまとめる	726	1	5	4.03	0.826
繰り返し練習し技能に習熟する	725	1	5	3.50	1.456

次に，有用とされた順で，回答毎に学系の傾向を集計した結果を示す。

(1) 「自ら調べてレポートや論文をまとめる」

学系ごとの差を確認するためにカイ二乗検定を行ったところ有意ではなく，学系による差はなかった。全体として大変有用，どちらかといえば有用が多かった。

		自ら調べてレポートや論文をまとめる					合計
		そのような講義，演習等は受講しなかった	全く有用ではなかった	どちらかといえば有用ではなかった	どちらかといえば有用であった	大変有用であった	
学系	人文社会	度数	0	3	34	168	336
	科学系	調整済み残差	-1.3	-0.5	0.8	0.1	-0.3
	自然科学	度数	2	3	24	106	241
	系	調整済み残差	2.0	0.3	0.5	-2.2	1.7
	医歯学系	度数	0	2	9	88	149
		調整済み残差	-0.7	0.3	-1.5	2.5	-1.7
	合計	度数	2	8	67	362	726

(2) 現場や実物で学ぶ

学系ごとの差を確認するためにカイ二乗検定を行ったところ、有意であった。残差分析の結果、人社系では受講なしと「どちらかといえば有用」、医歯学系は「大変有用」が有意に多かった。

			現場や実物で学ぶ					
			そのような 講義、演習 等は受講し なかった	全く有用 ではなか った	どちらか といえば 有用では なかった	どちらか といえば 有用であ った	大変有用 であった	合計
学 系	人文社会	度数	51	1	10	119	154	335
	科学系	調整済み残差	5.5	-1.5	0.8	2.4	-5.4	
	自然科学	度数	13	4	6	71	147	241
	系	調整済み残差	-2.4	1.7	0.0	-0.6	1.7	
	医歯学系	度数	1	1	2	35	110	149
		調整済み残差	-4.0	-0.2	-1.0	-2.2	4.7	
合計		度数	65	6	18	225	411	725

注) 網掛けは調整済み残差が1.96以上(5%水準で有意)であった項目

(3) 教員の話聞く

学系ごとの差を確認するためにカイ二乗検定を行ったところ有意ではなく、学系による差はなかった。全体としてどちらかといえば有用が多かった。

			教員の話聞く					
			そのような 講義、演習 等は受講し なかった	全く有用 ではなか った	どちらか といえば 有用では なかった	どちらか といえば 有用であ った	大変有用 であった	合計
学 系	人文社会	度数	0	5	36	213	82	336
	科学系	調整済み残差	-0.9	-0.3	1.3	1.4	-2.1	
	自然科学	度数	1	5	20	143	72	241
	系	調整済み残差	1.4	0.6	-0.6	-0.5	0.7	
	医歯学系	度数	0	2	11	85	51	149
		調整済み残差	-0.5	-0.3	-0.9	-1.0	1.8	
合計	度数	1	12	67	441	205	726	

(4) 自ら考えをもち他の学生と議論する

学系ごとの差を確認するためにカイ二乗検定を行ったところ、有意であった。残差分析の結果、自然系では受講なし、医歯学系は「どちらかといえば有用」が有意に多かった。

			自ら考えをもち他の学生と議論する					
			そのような 講義、演習 等は受講し なかった	全く有用 ではなか った	どちらか といえば 有用では なかった	どちらか といえば 有用であ った	大変有用 であった	合計
学 系	人文社会	度数	8	2	22	174	129	335
	科学系	調整済み残差	-2.2	-1.5	-2.3	1.2	1.4	
	自然科学	度数	19	3	29	94	95	240
	系	調整済み残差	3.6	0.0	1.8	-3.9	1.5	
	医歯学系	度数	3	4	16	91	35	149
		調整済み残差	-1.5	1.8	0.7	3.1	-3.5	
合計	度数	30	9	67	359	259	724	

注) 網掛けは調整済み残差が1.96以上(5%水準で有意)であった項目

(5) 学生が報告をまとめる

学系ごとの差を確認するためにカイ二乗検定を行ったところ、有意であった。残差分析の結果、自然系で受講なしが有意に多かった。

			学生が報告をまとめる					
			そのような 講義、演習 等は受講し なかった	全く有用 ではなか った	どちらか といえ ば有用では なかった	どちらか といえ ば有用であ った	大変有用 であった	合計
学 系	人文社会	度数	7	1	33	202	92	335
	科学系	調整済み残差	-1.0	-2.7	-0.9	0.7	1.0	
	自然科学	度数	11	6	29	127	68	241
	系	調整済み残差	2.1	1.2	0.6	-2.4	1.1	
	医歯学系	度数	2	5	18	98	26	149
		調整済み残差	-1.2	1.8	0.5	1.9	-2.6	
合計	度数	20	12	80	427	186	725	

注) 網掛けは調整済み残差が1.96以上(5%水準で有意)であった項目

(6) 繰り返し練習し技能に習熟する

学系ごとの差を確認するためにカイ二乗検定を行ったところ、有意であった。残差分析の結果、人社会系では受講なし、自然科学系では「どちらかといえば有用ではなかった」、医歯学系では「大変有用」が有意に多かった。

		繰り返し練習し技能に習熟する					合計
		そのような 講義、演習 等は受講し なかった	全く有用 ではまか った	どちらか といえば 有用では なかった	どちらか といえば 有用であ った	大変有用 であった	
学 系	人文社会 度数	105	4	30	133	63	335
	科学系 調整済み残差	6.0	-0.7	-0.9	0.2	-5.0	
	自然科学 度数	44	6	36	94	60	240
	系 調整済み残差	-1.4	1.5	3.1	0.0	-1.2	
	医歯学系 度数	6	1	7	57	78	149
	調整済み残差	-5.8	-0.9	-2.4	-0.3	7.5	
合計 度数		155	11	73	284	201	724

注) 網掛けは調整済み残差が1.96以上(5%水準で有意)であった項目

なお、自由記述(新潟大学で受けた講義、演習等で、特に有用だったと思うことがあればお書きください)で尋ねているが、講義、演習、実習等、個々の科目に関する記載が多いため、ローデータを参照願いたい。

4.11. 身につけた知識・能力の自己評価

「新潟大学で次のような知識や能力などがどのくらい身についた、または養われたと思いますか」という項目で、身につけた知識・能力の自己評価を求め、十分であったと思う5点、どちらかといえば十分であったと思う4点、どちらともいえない3点、どちらかといえば不十分であったと思う2点、不十分であったと思う1点として得点化した。

以下に平均値の高い順に記述統計料をまとめた結果を示す。「専門を理解するための基礎的な力」が最も高く、ついで「グループで協働する能力」であり、以下、「良好な対人関係を構築する能力」、「文書作成・執筆能力」、「自分の考えを表現したりプレゼンテーションする能力」、「ものごとを総合的に判断する力」、「課題を解決する能力」、「情報を処理したり分析したりする能力」、「モラル・倫理観・責任感」といった順であった。

これに対して、「地方創生に対する興味・関心」、「外国語の能力」などについては相対的に不十分と認知されているようであった。

身につけた知識・能力の自己評価	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
専門を理解するための基礎的な力	725	1	5	3.91	0.874
グループで協働する能力	722	1	5	3.86	0.941
良好な対人関係を構築する能力	721	1	5	3.77	1.013
文書作成・執筆能力	723	1	5	3.68	0.984
自分の考えを表現したりプレゼンテーションする能力	725	1	5	3.67	0.980
ものごとを総合的に判断する力	724	1	5	3.64	0.907
課題を解決する能力	723	1	5	3.62	0.963
情報を処理したり分析したりする能力	720	1	5	3.58	0.957
モラル・倫理観・責任感	720	1	5	3.55	0.968
他人と議論する能力	724	1	5	3.47	1.016
幅広い知識（人文社会科学系）	723	1	5	3.41	1.005
自ら課題を発見する能力	722	1	5	3.40	1.011
学んだことを社会や世界で役立てたいと思う心	725	1	5	3.36	1.038
パソコンなどの情報機器を使う能力	724	1	5	3.33	1.101
幅広い知識（数理系・自然科学系）	725	1	5	3.31	1.042
計画・立案の能力	724	1	5	3.27	0.986
自分の心身の健康に気をくばる大切さ	724	1	5	3.27	1.153
資格・免許	720	1	5	3.26	1.269
社会問題に対する興味・関心	724	1	5	3.24	1.057
異文化に対する興味・関心	724	1	5	3.22	1.135
評価する能力	722	1	5	3.16	0.963
地方創生に対する興味・関心	723	1	5	3.13	1.129
外国語の能力	723	1	5	2.76	1.120

続いて自己評価に学系毎の差があるか、分散分析を行い、事後検定の結果をまとめた。人
社系は他の学系と比べて、「グループで協働する能力」「良好な対人関係を構築する能力」
「文書作成・執筆能力」「ものごとを総合的に判断する力」「他人と議論する力」「幅広い
知識（人文社会科学系）」「社会問題に対する興味・関心」「異文化に対する興味・関心」
「地方創生に対する興味・関心」を身につけたと認知していた。自然系は他の学系と比べて、
「情報を処理したり分析したりする能力」「幅広い知識（数理系・自然科学系の知識）」を
他の学系に較べて身につけたと認知していた。医歯学系は他の学系と比べて、「専門を理解
するための基礎的な力」「モラル・倫理観・責任感」「学んだことを社会や世界で役立てたい
と思う心」「計画・立案の能力」「自分の心身の健康に気をくばる大切さ」を身につけたと

認知していた。

身につけた知識・能力の自己評価	学系毎の平均値と事後検定結果
専門を理解するための基礎的な力	医歯学系 (4.22) > 人社系 (3.80), 自然系 (3.88)
グループで協働する能力	人社系 (3.99) > 自然系 (3.68)
良好な対人関係を構築する能力	人社系 (3.90) > 自然系 (3.65), 医歯学系 (3.65)
文書作成・執筆能力	人社系 (3.84) > 自然系 (3.58), 医歯学系 (3.47)
自分の考えを表現したりプレゼンテーションする能力	
ものごとを総合的に判断する力	人社系 (3.72) > 自然系 (3.51)
課題を解決する能力	
情報を処理したり分析したりする能力	自然系 (3.73) > 人社系 (3.49)
モラル・倫理観・責任感	医歯学系 (3.70) > 自然系 (3.44)
他人と議論する能力	人社系 (3.62) > 自然系 (3.33)
幅広い知識 (人文社会科学系)	人社系 (3.80) > 自然系 (3.08), 医歯学系 (3.08)
自ら課題を発見する能力	
学んだことを社会や世界で役立てたいと思う心	医歯学系 (3.60) > 人社系 (3.36), 自然系 (3.24)
パソコンなどの情報機器を使う能力	
幅広い知識 (数理系・自然科学系)	自然系 (3.94) > 医歯学系 (3.38) > 人社系 (2.85)
計画・立案の能力	医歯学系 (3.53) > 人社系 (3.25), 自然系 (3.16)
自分の心身の健康に気をくばる大切さ	医歯学系 (3.52) > 自然系 (3.10)
資格・免許	医歯学系 (4.38) > 人社系 (3.13) > 自然系 (2.77)
社会問題に対する興味・関心	人社系 (3.44) > 自然系 (3.01), 医歯学系 (3.17)
異文化に対する興味・関心	人社系 (3.43) > 自然系 (2.97)
評価する能力	
地方創生に対する興味・関心	人社系 (3.36) > 自然系 (2.84), 医歯学系 (3.07)
外国語の能力	

4.12. 実社会の要請

「これらの知識や能力は実社会で活躍する上でどの程度必要だと思いますか。」について尋ね、必要であると思う 5 点，どちらかといえば必要であると思う 4 点，どちらともいえない 3 点，どちらかといえば不必要であると思う 2 点，不必要であると思う 1 点として得点化した。以下に平均値の高い順に記述統計料をまとめた結果を示す。

「モラル・倫理観・責任感」が最も高く，ついで「ものごとを総合的に判断する力」であり，以下「自分の心身の健康に気をくばる大切さ」，「課題を解決する能力」，「良好な対人関係を構築する能力」，「パソコンなどの情報機器を使う能力」，「自分の考えを表現したりプレゼンテーションする能力」，「自ら課題を発見する能力」といった順であった。

これに対して、「外国語の能力」、「地方創生に対する興味・関心」、「異文化に対する興味・関心」などは相対的に実社会で必要あるとは認知されていないようであった。

実社会で必要だと思う知識・能力	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
モラル・倫理観・責任感	703	1	5	4.78	0.526
ものごとを総合的に判断する力	703	1	5	4.67	0.568
自分の心身の健康に気をくばる大切さ	703	1	5	4.64	0.632
課題を解決する能力	703	2	5	4.62	0.575
良好な対人関係を構築する能力	702	1	5	4.61	0.669
パソコンなどの情報機器を使う能力	705	2	5	4.60	0.585
自分の考えを表現したりプレゼンテーションする能力	705	1	5	4.58	0.621
自ら課題を発見する能力	704	1	5	4.54	0.670
グループで協働する能力	705	1	5	4.53	0.684
文書作成・執筆能力	704	2	5	4.51	0.657
他人と議論する能力	705	1	5	4.49	0.707
情報を処理したり分析したりする能力	704	2	5	4.46	0.643
計画・立案の能力	703	1	5	4.44	0.685
専門を理解するための基礎的な力	704	1	5	4.26	0.844
社会問題に対する興味・関心	704	1	5	4.12	0.848
幅広い知識（人文社会科学系）	703	1	5	4.00	0.852
評価する能力	703	1	5	3.98	0.900
幅広い知識（数理系・自然科学系）	704	1	5	3.91	0.882
資格・免許	701	1	5	3.85	1.052
学んだことを社会や世界で役立てたいと思う心	705	1	5	3.81	0.987
外国語の能力	705	1	5	3.74	0.993
地方創生に対する興味・関心	705	1	5	3.72	0.996
異文化に対する興味・関心	705	1	5	3.69	0.990

続いて自己評価に学系毎の差があるか、分散分析を行い、事後検定の結果をまとめた。人社系は他の学系と比べて、「良好な対人関係を構築する能力」「パソコンなどの情報機器を使う能力」「社会問題に対する興味・関心」「幅広い知識（人文社会科学系）」「地方創生に対する興味・関心」が実社会に出てから必要と認知していた。自然系は他の学系と比べて、「自分の考えを表現したりプレゼンテーションする能力」「他人と議論する能力」「幅広い知識（数理系・自然科学系）」が実社会に出てから必要と認知していた。医歯学系は他の学系と比べて、「良好な対人関係を構築する能力」「資格・免許」「学んだことを社会や

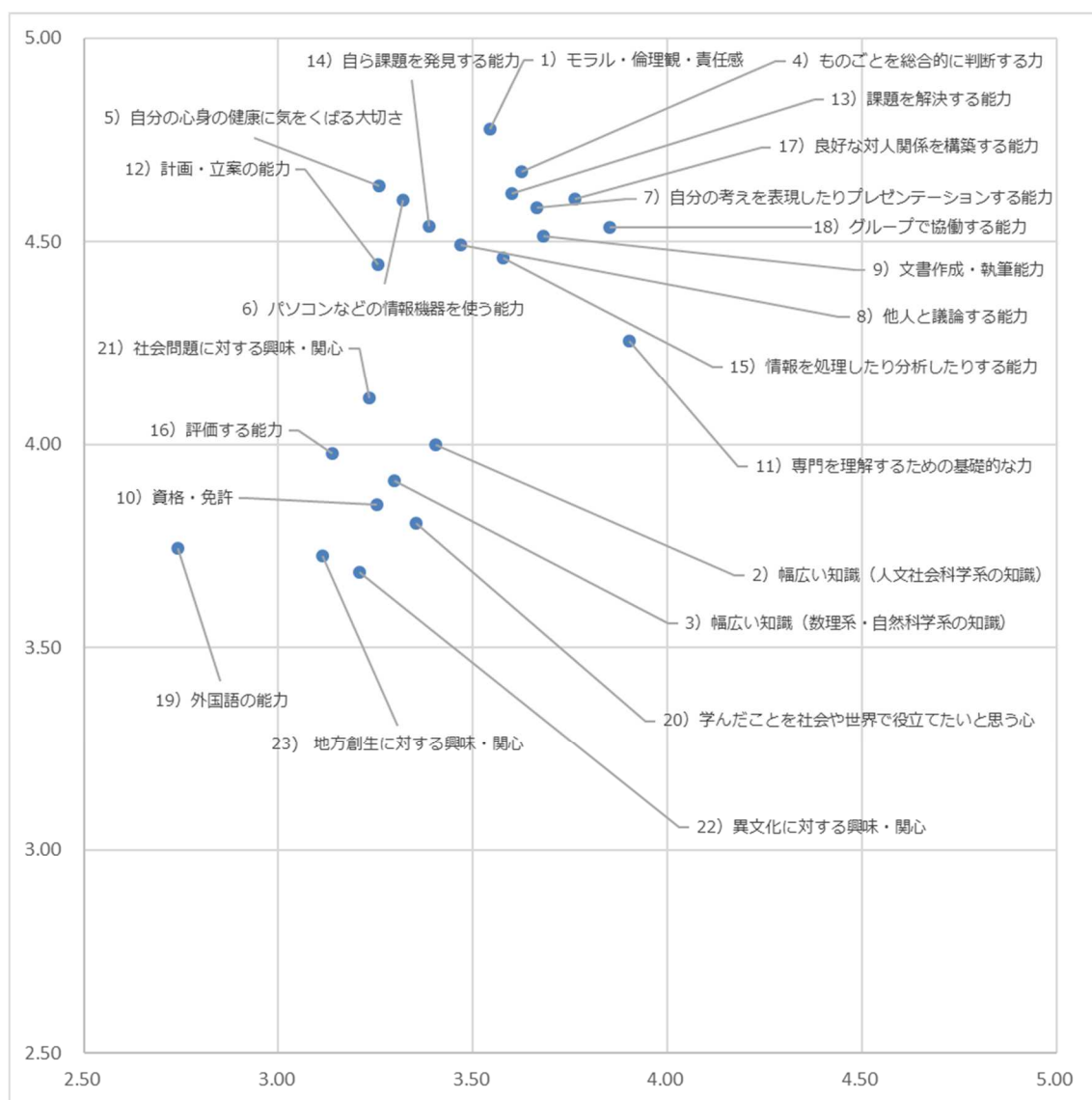
世界で役立てたいと思う心」「外国語の能力」が実社会に出てから必要と認知していた。

実社会で必要だと思う知識・能力	学系毎の平均値と事後検定結果
モラル・倫理観・責任感	
ものごとを総合的に判断する力	
自分の心身の健康に気をくばる大切さ	
課題を解決する能力	
良好な対人関係を構築する能力	人社系（4.66）、医歯学系（4.67）＞自然系（4.49）
パソコンなどの情報機器を使う能力	人社系（4.66）＞自然系（4.62）、医歯学系（4.44）
自分の考えを表現したりプレゼンテーションする能力	自然系（4.75）＞人社系（4.52）、医歯学系（4.46）
自ら課題を発見する能力	
グループで協働する能力	
文書作成・執筆能力	
他人と議論する能力	自然系（4.61）＞人社系（4.43）
情報を処理したり分析したりする能力	
計画・立案の能力	
専門を理解するための基礎的な力	医歯学系（4.40）＞自然系（4.27）＞人社系（4.06）
社会問題に対する興味・関心	人社系（4.23）＞自然系（4.02）、医歯学系（4.01）
幅広い知識（人文社会科学系）	人社系（4.10）＞自然系（3.92）
評価する能力	
幅広い知識（数理系・自然科学系）	自然系（4.19）＞医歯学系（3.98）＞人社系（3.68）
資格・免許	医歯学系（4.54）＞人社系（3.73）、自然系（3.61）
学んだことを社会や世界で役立てたいと思う心	医歯学系（4.04）＞人社系（3.73）、自然系（3.76）
外国語の能力	医歯学系（3.99）＞人社系（3.61）
地方創生に対する興味・関心	人社系（3.82）＞自然系（3.59）
異文化に対する興味・関心	

4.13. 身につけた能力と社会で必要な能力の関係

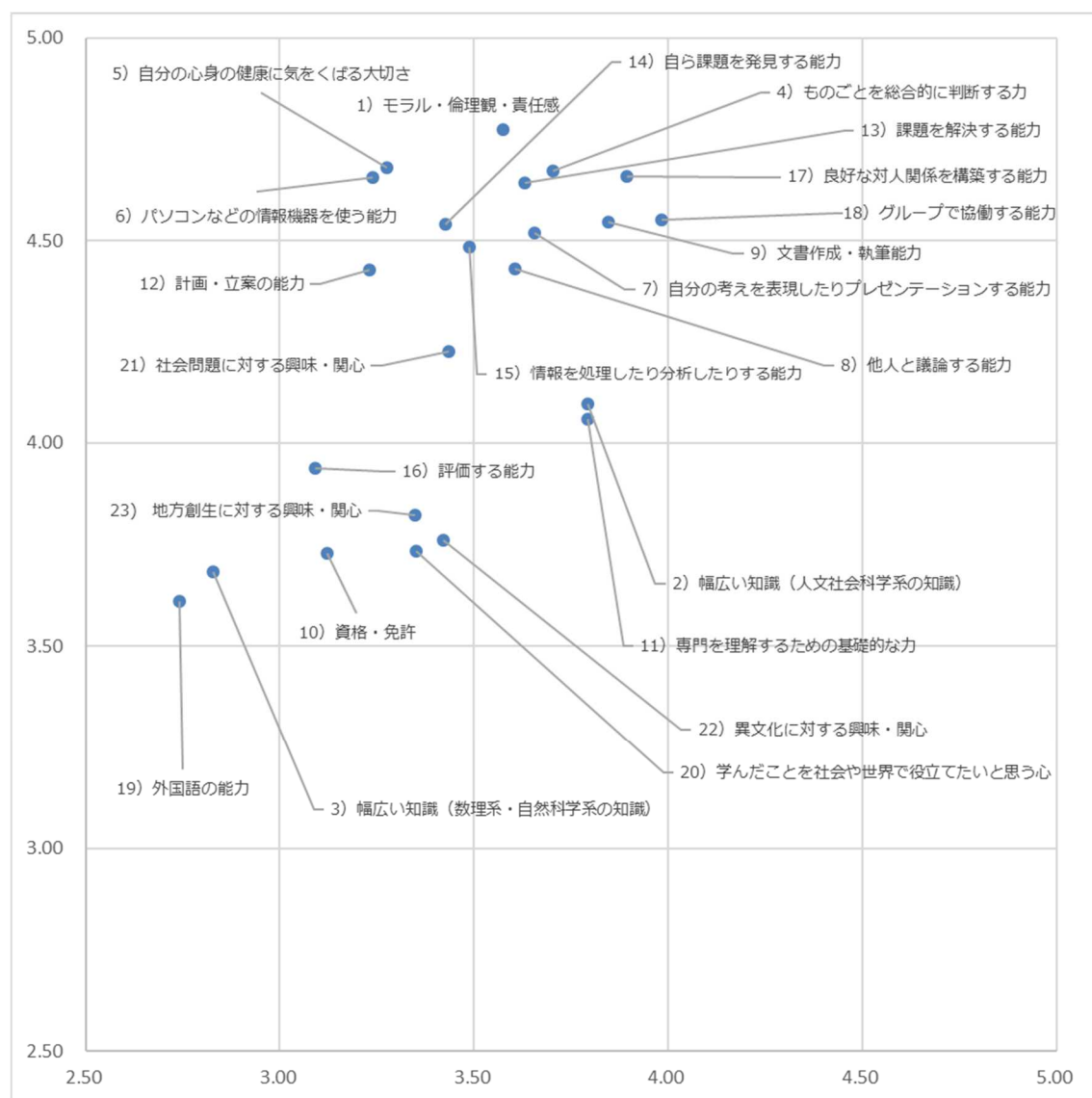
「新潟大学で次のような知識や能力などがどのくらい身についた、または養われたと思いますか（自己評価）」と「これらの知識や能力は実社会で活躍する上でどの程度必要だと思いますか（社会の要請）」の関連を把握するために、横軸に身につけた知識・能力、縦軸に実社会で必要な能力をおいてプロットしたのが下図である。23 の能力全てにおいて、社会の要請の方が自己評価を上回っている。

この中でも、差の小さい上位 3 項目は「専門を理解するための基礎的な力」「学んだことを社会や世界で役立てたいと思う心」「異文化に対する興味・関心であること」であった。このことから、専門理解のための基礎的な力、学修成果を活用する意欲、異文化への興味・関心という 3 つの力に関しては、回答者が実社会で必要であると考える程度に近い学修成果を、回答者が得ているものと考えられた。



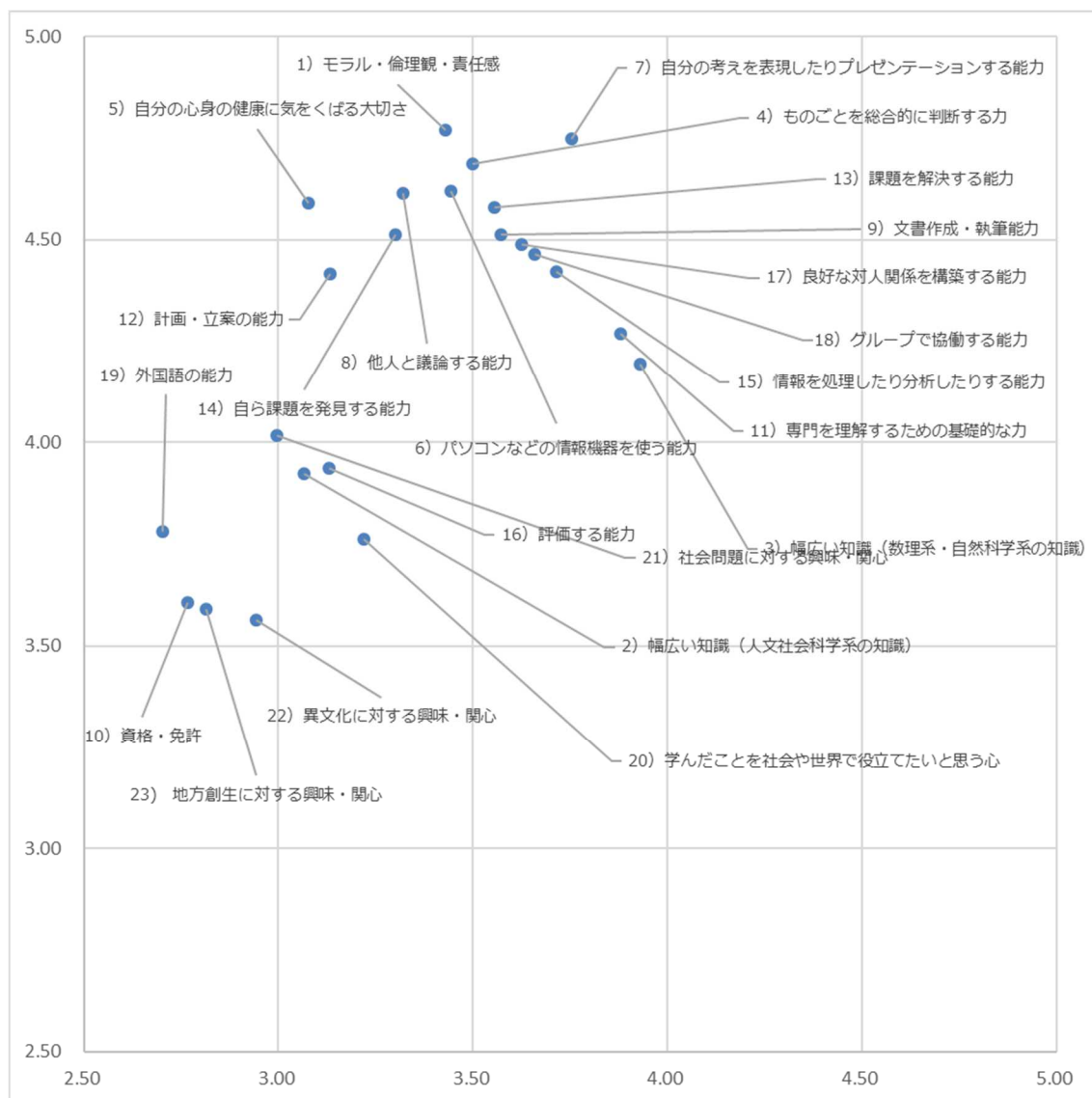
人文社会・教育科学系

人文社会・教育科学系のみ抽出し、横軸に身につけた知識・能力、縦軸に実社会で必要な能力をプロットしたのが下図である。



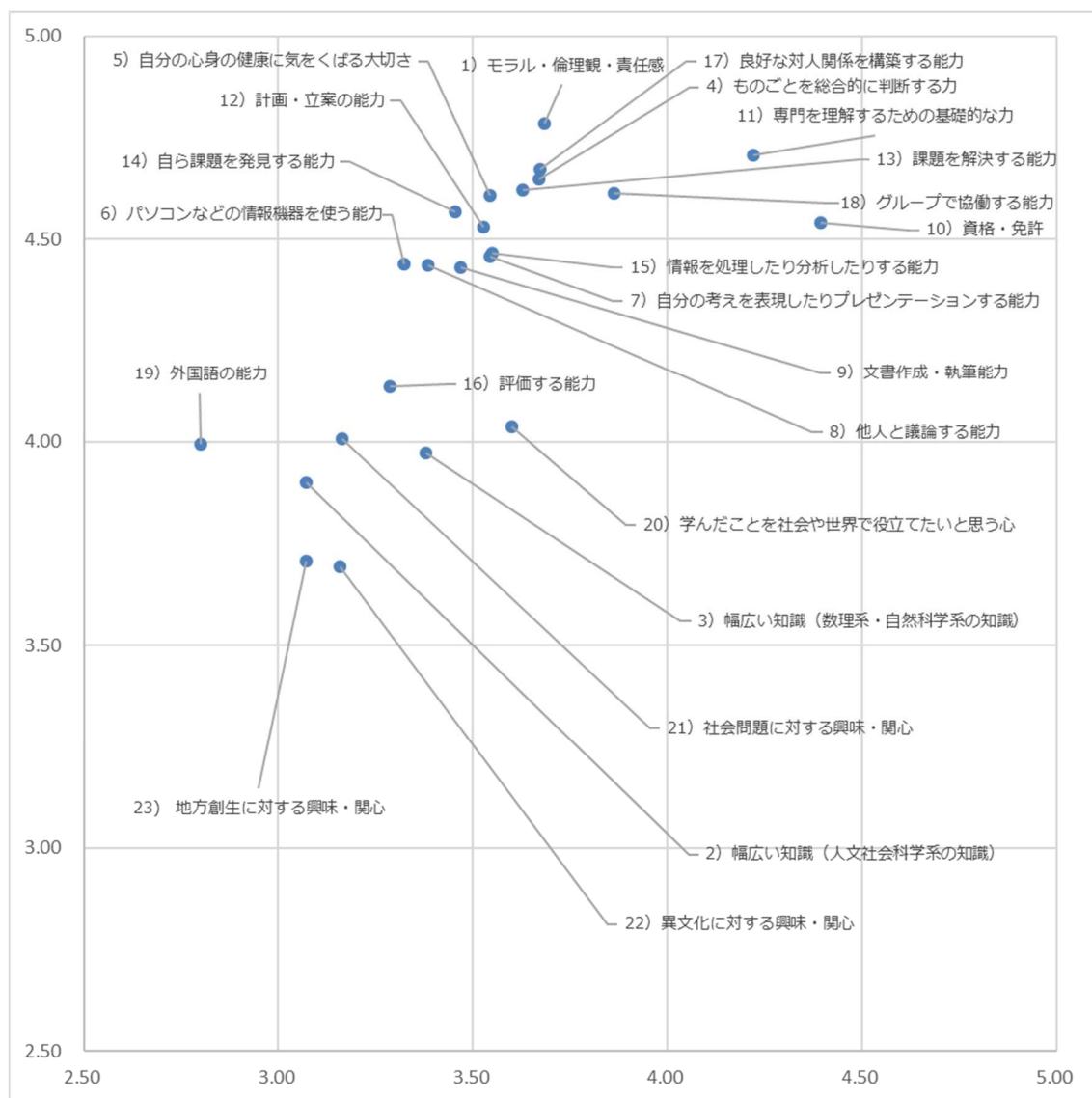
自然科学系

自然科学系のみ抽出し、横軸に身につけた知識・能力、縦軸に実社会で必要な能力を置いてプロットしたのが下図である。



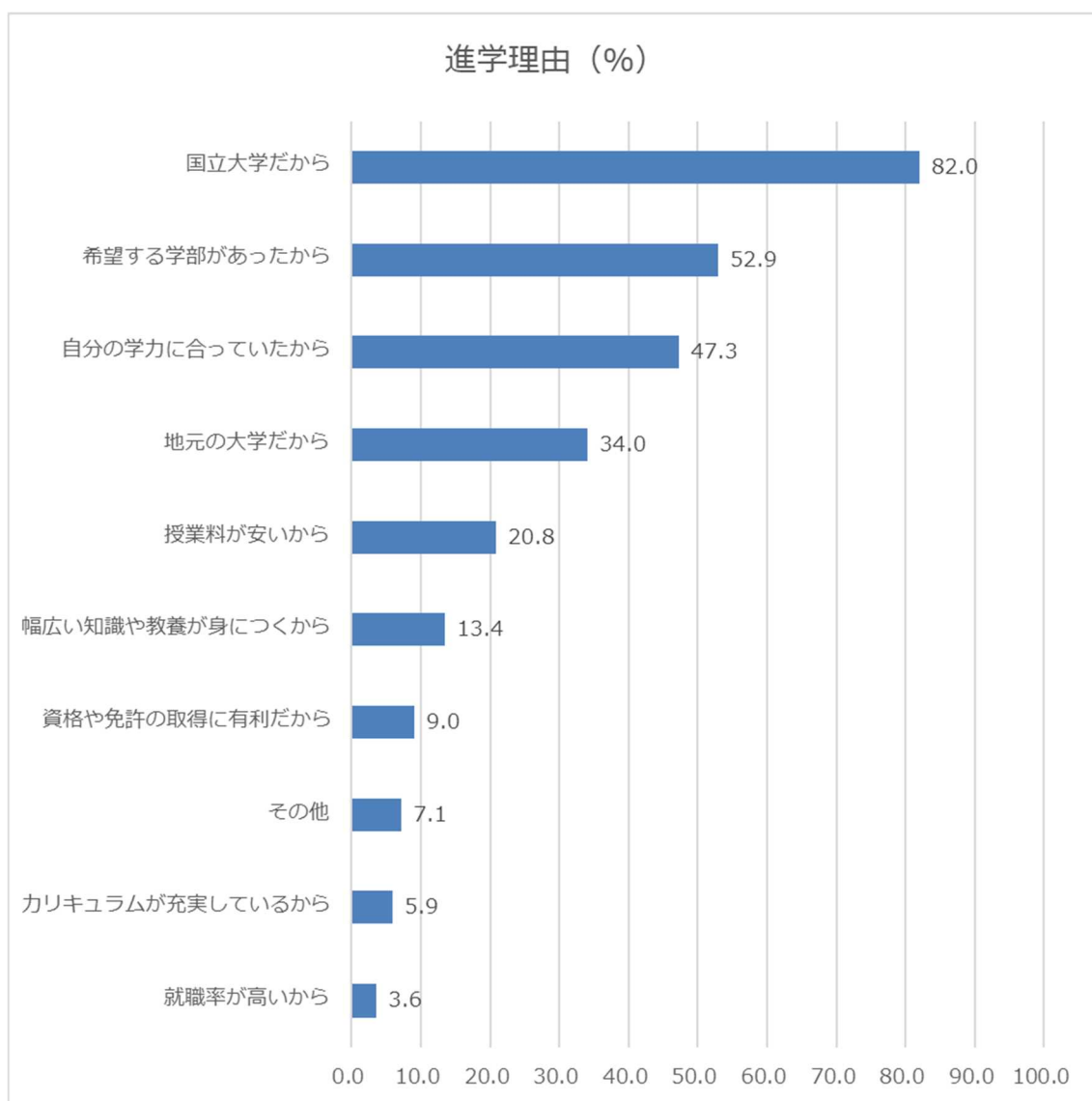
医歯学系

医歯学系のみ抽出し、横軸に身につけた知識・能力、縦軸に実社会で必要な能力においてプロットしたのが下図である。



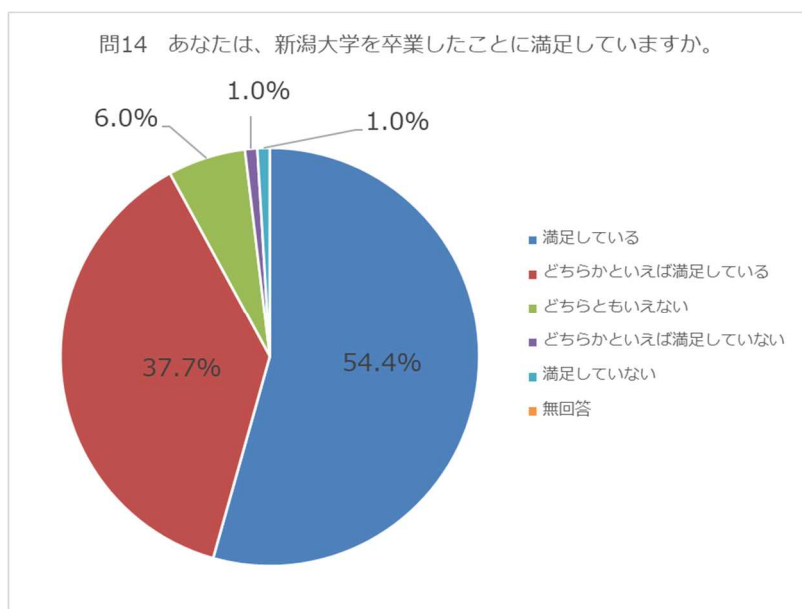
4.14. 本学への進学理由

「あなたにとって、新潟大学に進学した理由は何ですか」について尋ねた。「国立大学だから」が最も多く（82.0%）、以下「希望する学部があったから」が 52.9%、「自分の学力に合っていたから」が 47.3%、「地元の大学だから」が 34.0%、「授業料が安いから」が 20.8%であった。以下、「幅広い知識や教養が身につくから」が 13.4%、「資格や免許の取得に有利だから」が 9.0%、「その他」が 7.1%、「カリキュラムが充実しているから」が 5.9%、「就職率が高いから」が 3.6%であった。



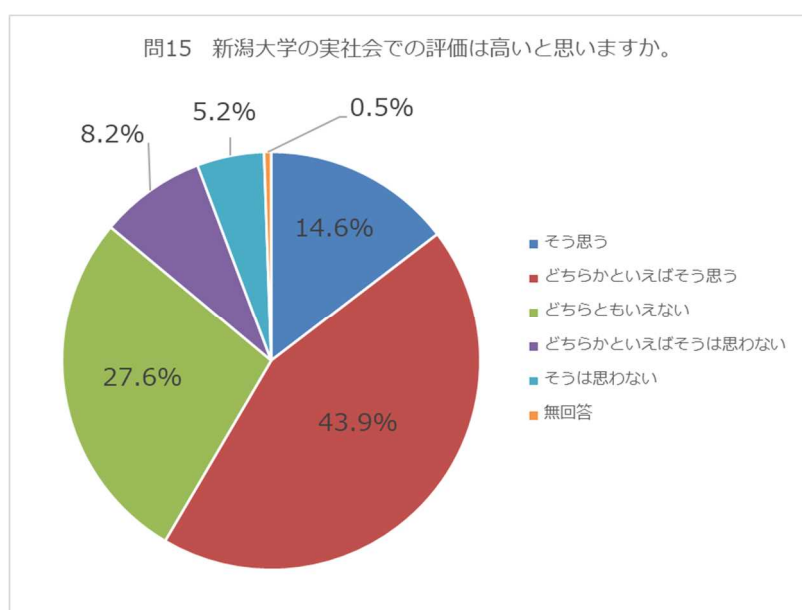
4.15. 満足度

「あなたは、新潟大学を卒業したことに満足していますか」について尋ねた。満足 54.4%，どちらかといえば満足 37.7%であり，回答者の 92.1%が満足していることが示された。



4.16. 本学の評価

「新潟大学の実社会での評価は高いと思いますか」について尋ねた。そう思うが 14.6%，どちらかといえばそう思うが 43.9%であり，回答者の 58.5%が，新潟大学は実社会での評価が高いと思っていることが示された。



5. 企業調査

5.1. 業種

回答頂いた企業の業種は以下の通りであった。

		件数	%
A	農業、林業	1	0.8
B	漁業	0	0.0
C	鉱業、採石業、砂利採取業	0	0.0
D	建設業	9	7.6
E	製造業	31	26.1
F	電気・ガス・熱供給・水道業	1	0.8
G	情報通信業	10	8.4
H	運輸業、郵便業	3	2.5
I	卸売業、小売業	7	5.9
J	金融業、保険業	16	13.4
K	不動産業、物品賃貸業	1	0.8
L	学術研究、専門・技術サービス業	1	0.8
M	宿泊業、飲食サービス業	0	0.0
N	生活関連サービス業、娯楽業	3	2.5
O	教育、学習支援業	1	0.8
P	医療、福祉	8	6.7
Q	複合サービス事業	0	0.0
R	サービス業(他に分類されないもの)	3	2.5
S	公務	21	17.6
T	その他	3	2.5
	無回答	0	0.0
	上記以外	0	0.0
	計	119	100.0

5.2. 在職者数

在職者数の平均は以下の通りであった。

	平均
新潟大学卒業生の現在の在職者数	59.2
(大学院修了生)※雇用者 0 名の企業 20 社を除く	16.1

5.3. 卒業生の知識・能力レベル

「新潟大学卒業生の知識や能力についての印象をお答えください」について、5段階で評価してもらった。十分である5点、どちらかといえば十分である4点、どちらともいえない3点、どちらかといえば不十分である2点、不十分である1点として得点化し、平均値の高い順にみていく。「モラル・倫理観・責任感」が最も高く、ついで「専門を理解するための基礎的な力」であり、以下、「パソコンなどの情報機器を使う能力」、「良好な対人関係を構築する能力」、「ものごとを総合的に判断する力」といった能力が高く評価されている傾向が見て取れる。これに対して、平均値の低い順では「外国語の能力」、「異文化に対する興味・関心」、「評価する能力」、「地方創生に対する興味・関心」、「資格・免許」となっている。

	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
1) モラル・倫理観・責任感	112	1	5	4.29	0.728
11) 専門を理解するための基礎的な力	112	3	5	4.16	0.637
6) パソコンなどの情報機器を使う能力	111	2	5	4.07	0.657
17) 良好な対人関係を構築する能力	111	3	5	4.05	0.699
4) ものごとを総合的に判断する力	111	2	5	4.05	0.644
13) 課題を解決する能力	112	2	5	3.99	0.704
18) グループで協働する能力	111	2	5	3.99	0.732
3) 幅広い知識（数理系・自然科学系の知識）	111	2	5	3.95	0.711
15) 情報を処理したり分析したりする能力	112	3	5	3.94	0.634
7) 自分の考えを表現したりプレゼンテーションする能力	111	2	5	3.90	0.762
12) 計画・立案の能力	112	2	5	3.89	0.662
9) 文書作成・執筆能力	111	2	5	3.87	0.715
2) 幅広い知識（人文社会科学系の知識）	111	2	5	3.83	0.712
8) 他人と議論する能力	111	2	5	3.82	0.741
14) 自ら課題を発見する能力	112	2	5	3.76	0.726
20) 学んだことを社会や世界で役立てたいと思う心	111	1	5	3.71	0.767
5) 自分の心身の健康に気をくばる大切さ	111	2	5	3.69	0.724
21) 社会問題に対する興味・関心	111	1	5	3.61	0.765
10) 資格・免許	111	2	5	3.59	0.731
23) 地方創生に対する興味・関心	111	1	5	3.56	0.759
16) 評価する能力	110	2	5	3.53	0.700
22) 異文化に対する興味・関心	111	1	5	3.44	0.722
19) 外国語の能力	111	1	5	3.22	0.652

5.4. 実社会での要請

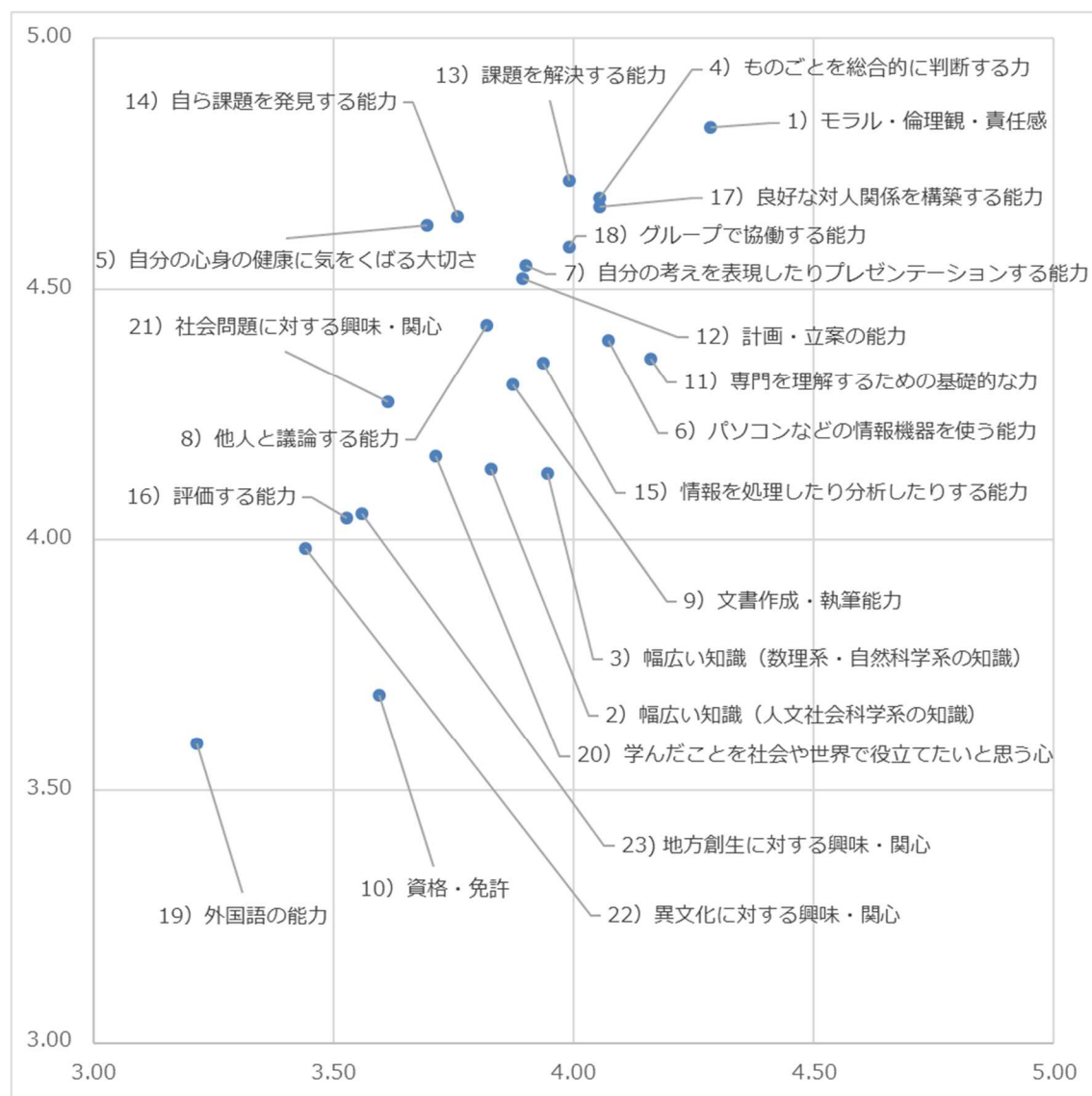
前項で聞いた23の知識や能力について実社会で活躍する上でどの程度必要かについて尋ねた。必要であると思う5点，どちらかといえば必要であると思う4点，どちらともいえない3点，どちらかといえば不必要であると思う2点，不必要であると思う1点として得点化し，平均値の高い順にみていく。「モラル・倫理観・責任感」が最も高く，ついで「課題を解決する能力」であり，以下，「ものごとを総合的に判断する力」，「良好な対人関係を構築する能力」，「自ら課題を発見する能力」といった能力が実社会で必要と認知されている傾向が見て取れる。これに対して，平均値の低い順では「外国語の能力」，「資格・免許」，「異文化に対する興味・関心」，「評価する能力」，「地方創生に対する興味・関心」となっている。

	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
1) モラル・倫理観・責任感	113	3	5	4.82	0.406
13) 課題を解決する能力	113	3	5	4.72	0.508
4) ものごとを総合的に判断する力	113	3	5	4.68	0.487
17) 良好な対人関係を構築する能力	113	3	5	4.66	0.528
14) 自ら課題を発見する能力	113	3	5	4.65	0.596
5) 自分の心身の健康に気をくばる大切さ	113	3	5	4.63	0.570
18) グループで協働する能力	113	3	5	4.58	0.563
7) 自分の考えを表現したりプレゼンテーションする能力	113	3	5	4.55	0.534
12) 計画・立案の能力	113	3	5	4.52	0.584
8) 他人と議論する能力	112	3	5	4.43	0.581
6) パソコンなどの情報機器を使う能力	113	3	5	4.40	0.560
11) 専門を理解するための基礎的な力	113	3	5	4.36	0.669
15) 情報を処理したり分析したりする能力	113	3	5	4.35	0.640
9) 文書作成・執筆能力	113	2	5	4.31	0.614
21) 社会問題に対する興味・関心	113	3	5	4.27	0.685
20) 学んだことを社会や世界で役立てたいと思う心	113	3	5	4.17	0.755
2) 幅広い知識（人文社会科学系の知識）	113	3	5	4.14	0.666
3) 幅広い知識（数理系・自然科学系の知識）	113	3	5	4.13	0.701
23) 地方創生に対する興味・関心	113	3	5	4.05	0.811
16) 評価する能力	113	2	5	4.04	0.724
22) 異文化に対する興味・関心	113	2	5	3.98	0.790
10) 資格・免許	113	3	5	3.69	0.669
19) 外国語の能力	113	1	5	3.59	0.831

5.5. 卒業生の知識・能力レベルと実社会の要請の関係

「新潟大学卒業生の知識や能力についての印象」と「これらの知識や能力は実社会で活躍する上でどの程度必要か（実社会の要請）」の関連を把握するために、横軸に印象としての新潟大学卒業生の知識・能力レベル、縦軸に実社会の要請をプロットしたのが下図である。

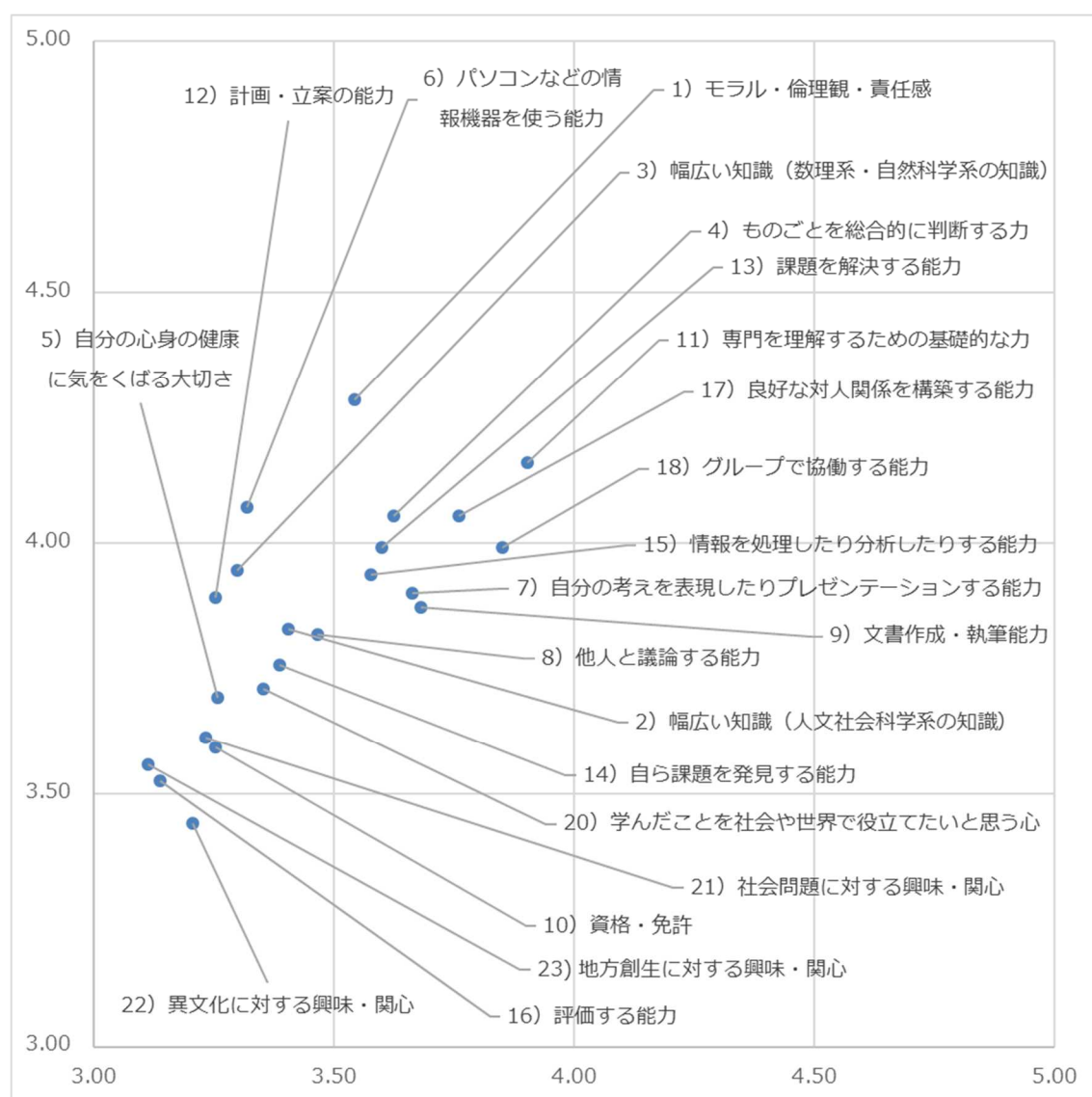
全体として企業が印象として抱く新潟大学卒業生の知識・能力レベルと、それらの能力が実社会でどの程度必要かという認識の差は大きくないものと考えられる。詳細に見るために、この差について大きなものを上から順で3つ抽出すると「自分の心身の健康に気をくばる大切さ」、「自ら課題を発見する能力」、「課題を解決する能力」であった。このことから、調査回答企業は新潟大学卒業生に対して、より高い健康意識と課題発見・解決能力を養うことを求めていることが推察できる。



5.6. 学生の自己評価と企業からみた卒業生の知識・能力レベル

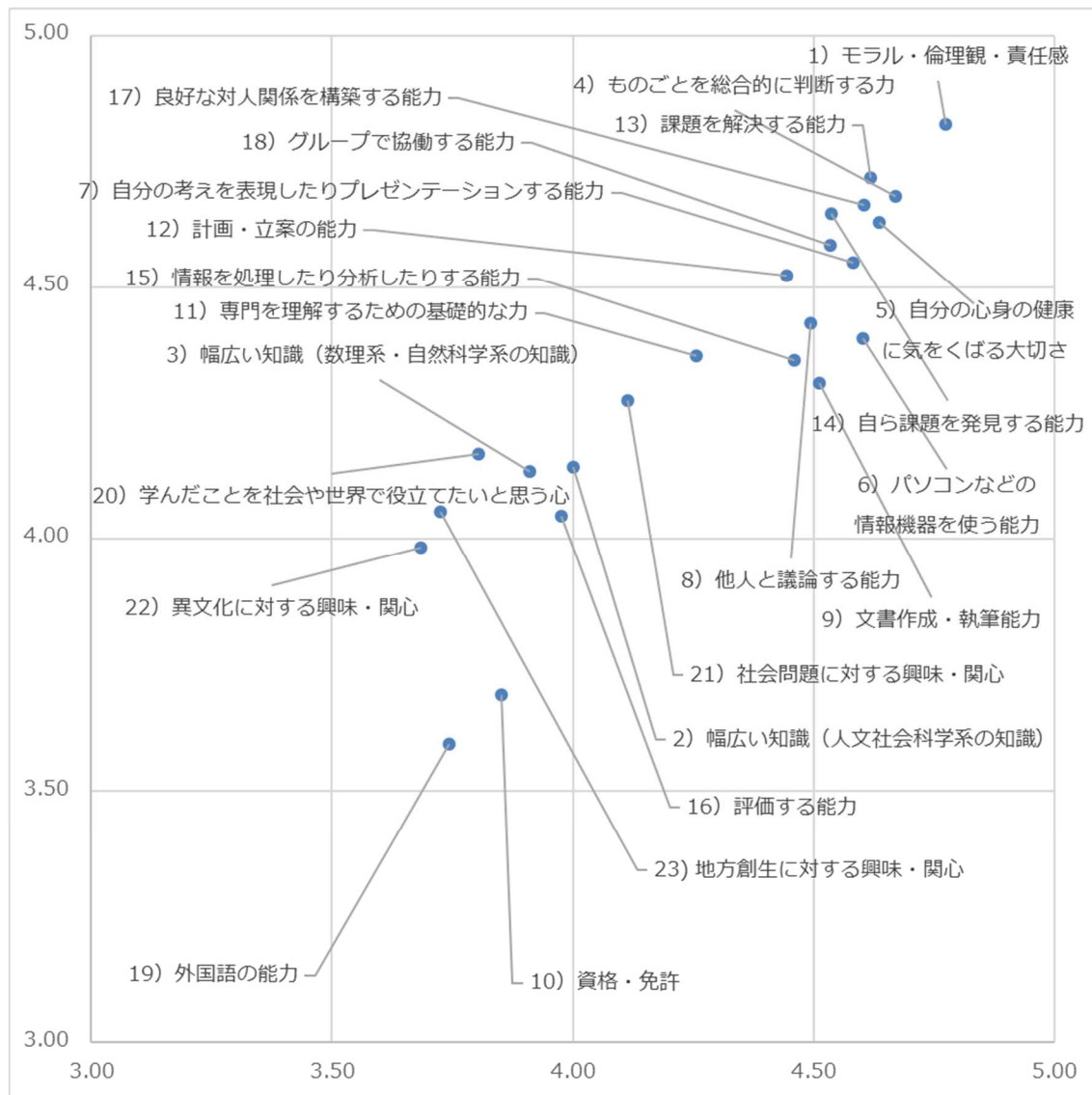
つぎに、卒業生回答者が身につけたと自己評価した知識や能力（学生の自己評価）と、企業回答者が印象として抱く新潟大学卒業生の知識・能力（企業による他者評価）との間の差を確認するため、卒業生を横軸に、企業を縦軸にプロットしたのが下図である。

全体として学生の自己評価と企業による他者評価の差は大きくないものと考えられる。詳細に見るために、この差について大きなものを上から順で3つ抽出すると「パソコンなどの情報機器を使う能力」、「モラル・倫理観・責任感」、「幅広い知識（数理系・自然科学系の知識）」であった。このことから、これら3つの知識・能力を育成する大学教育の改善について検討することが重要であることが推察できる。



5.7. 卒業生と企業からみた実社会での要請

つぎに、実社会で求められる能力について、企業回答者と卒業生回答者にギャップがあるかどうか確認するため、卒業生を横軸に、企業を縦軸にプロットしたのが下図である。全体として、企業回答者と卒業生回答者には大きな差がないと考えられる。



5.8. 新潟大学に求められるもの

今後、新潟大学に求められると思われるものについて、「非常に重要である」と「やや重要である」を加え、そのポイントが上位のものから並べたものが下図である。

「専門教育の充実」と「人間性育成への取り組み」は90%以上であった。80%台でみると「教養教育の充実」、「キャリア形成支援への取り組み」であった。70%台は「産学連携の強化」、「就職指導の強化」、「国際化への取り組み」であった。このことから、企業回答者が新潟大学に求めるものは、専門教育の充実と、学生の人間性育成を手厚くすることを求めていることが推察された。

